



2019.12  
vol.218

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

報恩講 本山参拝



### その《向こう》に 学校長 飯山 等

人はなぜ心地よい響きと、耳障りな響きを感じてしまうのでしょうか。私たちは特に深く考えることなく「音が調和する」と言います。でもどうして私たちの耳はハーモニーを聞くのだろう?そして、それを協和していると感じ、あるいは不協和だと感じるのでしょうか。辞書にも、音楽的な解説から広げて、「不協和音とは、長二度(ドとシ)や短二度(ミとファ)など、高さの異なる二つ以上の音が同時に響く時、調和せず不快に濁って聞こえる音。心をあわせて仲良くせず、たがいに譲らずきしみを立てることのたとえ」と広い場面にまで及んで解釈がなされています。また、「一部に違和感をのこし、不調和で不安定な感じを与える。近代音楽ではかえってその特性を生かす傾向が つよい」と説明されています。さらにその用例として「あまりに美しい完全な和弦が連行すると単調になり退屈になるので、適当な不協和音を適当に挿入することによって、曲の変化と活気が生じる」と、寺田寅彦の『連句雑俎』の文が紹介されていました。現代に至上の音楽とされているモーツァルトも、当時は音が多すぎると嫌悪されました。現在では20世紀の傑作とされているストラビンスキーの「春の祭典」も、初演当初は音の暴力との厳しい評価に晒されました。耳が、目が慣れていないがゆえに違和感を抱き、濁りと判じ、感受性を小さく固定し、小さな経験に心身を閉ざしがちな私たちです。19世紀ドイツの思想家カール・マルクスは言います。「五感の形成はいままでの全世界史の一つの労作である」(経済学・哲学草稿)と。音楽だけではなく、美も、食も、さまざまな感受性は世界史の労作として拓かれてきた。私たちの現在も、つねに、その《向こう》に直面しているのです。

今年の4月、私の娘の子が3歳6ヶ月のとき、「お母さん、新はお母さんのお腹にやって来る前、どこにいたの?」と私の娘に訊いたそうです。保育園で、友だちのお母さんのお腹が大きくなって、やがて赤ちゃんを抱いて、「新君もお母さんのお腹にいたのだよ」と言われたことが幾度か重なって、自身もお母さんのお腹から生まれてきたと思うようになったのでしょうか。そのうえで、《その前》を尋ねたのです。私はその話を娘から聞いたときに思ったのです。どうして私のように問うことをしなくなったのだろうと。それは問いとして成り立たないと思ってしまう自分がいて、母親の妊娠から自分がスタートするという答えをもってしまっているからではないか。答えを持つ前のわたしは、それを問いとして胸に抱いていたかもしれない。しかし長じて、それは問いとして成り立たないとして、私の中で処理された。科学的でないという理由で。しかし、それはほんとうに答えを得たと言いきれるのだろうか。私たちが何かの物差しを当て、こちら側と向こう側に分ける。そしてときに、それを可解と不可解とに整序して、可解のこちら側に身を置いてしまい、ことの始終を割り切ってしまう。でも、それはことを尽くしての受容と云うのでしょうか。「始まりがあって 終わりがあるから／始まりもなく 終わりもないものが見えてくる」。谷川俊太郎の『夕焼け』の一節です。詩は次のように始まります。「家に年寄りがいるのはいいことだ／あかんぼがいるのと同じくらいいいことだ／ふたつは似ても似つかないことのようにでいて／実は一本のあざなえる縄の両端のようにそっくり／始まりがあって終わりがあるから／始まりもなく 終わりもないものが見えてくる」。深い余韻とともに、静かな、そして広く深い問いの海へと私をいざないます。